

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

|  |                            |
|--|----------------------------|
| 論文提出者指名  | 白川太郎                       |
| 論文題目   | 13-14世紀転換期イタリア半島における預言者の研究 |
| <p>本論文は、13-14世紀転換期イタリア半島に出現した、幻視・脱魂などの神秘体験により周囲から「聖人」、「カリスマ」と見做された宗教指導者を「預言者」の呼称で類型化し、そのような「預言者」の周囲に集まった崇敬サークルの人的構成、その集団の聖職位階制教会との関係、および教会の規律化への貢献などを分析しながら、結論として、「預言者」とその崇敬サークルが同時期の北中部イタリアの教会で進行しつつあった「司牧革命」の一端を補完的に担う役割を果たしたことを明らかにするものである。</p> <p>本論文は二部構成となっている。第一部では、第二部で具体的に扱われる「預言者」の活動を分析するための前提として、古代末期から中世後期までの北中部イタリア教会史をめぐる諸問題が包括的に扱われる。とくに第一部での重要な論点は、「預言者」の運動がこれまでの研究史で、「聖職位階制教会・男性」と「俗人・民衆の霊性・女性」の二項対立の図式に従い、「反・聖職位階制的」な民衆宗教運動の歴史として語られ、また同時に、一定の教会の立場からの「目的論的」な視点に基づく歴史として描かれてきたことへの批判である。第一部では、このような批判的視点に立ちながら、「預言者」の活動の前提となる諸問題（例えば、中世後期イタリアにおける教会の教区制度や聖職位階制、贖罪者の運動、隠修修道制、預言、フランチェスコ会などの托鉢修道会と司牧など）の概観が、研究史とその問題点とともに与えられている。</p> <p>第二部は、「預言者」の具体的な例として、ドルチーノ・ダ・ノヴァーラ、マイフレダ・ダ・ピローヴァノ、キアラ・ダ・モンテファルコ、マルゲリータ・ダ・コルトーナの4人を取り上げ、北中部イタリアにおける「聖職位階制教会」と「預言者」の活動の関係について扱う。最初に取り上げるドルチーノは、これまでの研究史では、主に千年王国主義の異端運動の指導者として理解されてきたが、本論文では、ドルチーノが属した「アポストリ」に関する異端審問記録の精査により、ドルチーノらの「アポストリ」の活動が民衆への異端運動の扇動としてよりも、むしろ教区での司牧の補完的役割にその意義があったことが指摘される。また、同時期にドルチーノとともに異端として断罪された贖罪者グリエルマの信奉者マイフレダ・ダ・ピローヴァーロに対する崇敬についても、異端審問記録の精査により、そこには明確な反教権的な異端としての活動が見出されないことが論証される。この二つの事例から、この時期の北中部イタリアで「異端」として告発された集団が、思想や教説を共にする異端集団というよりも預言者の個人的求心力に基づく崇敬サークルであったことが明らかにされる。</p> <p>続いて、より「正統」側に包摂された事例から、「預言者」とその周囲に形成された人的結合のあり方が考察される。その最初の例は、女子修道院長として聖性の評価が高かったキアラ・デ・モンテファルコである。彼女の周囲には生前から崇敬サークルが形成されたが、そのサークルは都市モンテファルコにおいて、性別や身分を超えた人々からなる地域教会の信仰実践の中心であったことが列聖審問の記録などの分析から提示される。第二の例は、都市コルトーナで崇敬されたマルゲリータ・ダ・コルトーナである。マルゲリータは貴族の愛人を経て改心し「贖罪者」となった人物だが、彼女に対する崇敬はフランチェスコ会士ジュンタ・ベヴェニャーティによる『事績録』の影響もあり都市コルトーナの「市民的宗教」にまで高まり、彼女の記憶が「聖職位階制教会」や托鉢修道会とは異なる意味で教会の規律化に大きな影響を与えたことが論じられる。これらの第二部の事例分析を通じて「預言者」の活動が教会の司牧や典礼が機能不全に陥った地域においてそれを補完する一つの方法となっ</p> |                            |

たこと、また「預言者」のカリスマ的な権威を通じ、教会の規律化を推進する力ともなったことが結論として述べられる。

以上が内容の要旨であるが、本論文は、まず、13-14世紀転換期の北中部イタリアでの「預言者」の活動について、それが既存の教会体制と対立する現象というよりもむしろ、「聖職位階制教会」や托鉢修道会の活動を補完する役割を果たした側面を明らかにした点で大きな意義がある。また、先行研究においては「異端」、「聖人」、「神秘主義者」などの別個のカテゴリーで捉えられてきた、中世後期イタリアで宗教的なカリスマとその周囲に形成された崇敬サークルを、当時も用いられていた「預言者」という概念で横断的に理解し、そうすることで中世後期イタリアの宗教史理解の地平を広げた点、そして、未刊行史料も含めた一次史料の分析を通じて、正統と異端の枠組みを超えて、また不用意に実体化して語られやすい「霊性」よりも「実践」や実践者のネットワークに注目して、教会内の司牧を担う信仰実践のサークルとして位置づけた点で中世イタリア教会史・宗教史の新しい展開として高く評価できる。

このような評価を前提とした上で、問題点もまた指摘しておきたい。一つは、第一部で扱われる中世イタリアの教会制度、贖罪者・隠修士の運動、預言の伝統、正統と異端、聖人崇敬といった様々なテーマの概観は確かに第二部の前提および背景として重要であり、克明な研究史の検討としての意義は十分に認めるが、第二部の具体的な「預言者」の分析と、第一部の議論が必ずしも整合的につながっていない印象も受ける点である。とくに、第二部で中心的なテーマとなる「預言／預言者」については第1部第1章4節で古代末期以降の展開について説明が与えられているが、中世後期における預言／予言文化の広がりについての説明は必要であろう。次に、「預言者」と崇敬サークルの活動が、「聖職位階制教会」の司牧を補完し、教会の規律化を促す役割を果たしたという結論に関するものである。この結論の大筋は認めるとしても、「アポストリ」のように異端の烙印を押された「預言者」の運動が、反教権的な変革運動としての側面や教会の規律化を破壊する側面も有したのではないかという反論もありうる。今後のさらなる検討を期待したい。

最後に改めて、本論文は、イタリアの文書館に所蔵された一次史料の克明な分析を行いながら、中世後期イタリアの「預言者」と総称できる宗教的なカリスマとその崇敬サークルの信仰実践に関して、新たな視点に基づく歴史像を提示することに成功しており、博士学位論文に値するものである。

|          |               |       |           |                                      |
|----------|---------------|-------|-----------|--------------------------------------|
| 公開審査会開催日 | 2024年1月20日    |       |           |                                      |
| 審査委員資格   | 所属機関名称・資格     | 氏名    | 専門分野      | 博士学位                                 |
| 主任審査委員   | 早稲田大学文学学術院・教授 | 甚野 尚志 | 西洋中世史     | 博士(早稲田大学)                            |
| 審査委員     | 早稲田大学文学学術院・教授 | 中澤 達哉 | 近世・近代中東欧史 | 博士(早稲田大学)                            |
| 審査委員     | 慶應義塾大学文学部・教授  | 赤江 雄一 | 西洋中世史     | Ph.D. (リーズ大学<br>University of Leeds) |
| 審査委員     |               |       |           |                                      |
| 審査委員     |               |       |           |                                      |